

## 《書評》

Joseph North,

*Literary Criticism: A Concise Political History*

Cambridge: Harvard UP, 2017.

秦 邦生

十九世紀末のイギリス文化について知識を得ることを第一の目的としてオスカー・ワイルドの小説をわざわざ手に取る読者は、この世にどれくらい存在するだろうか。そのような目的でワイルドを読むのは「学者」だけなのではないか。一般読者たちはもっと定義しづらいなにか、例えば「人生を生きる助けとなるなにか」(7)を文学作品に求めているのではないだろうか——本書の冒頭近くでジョセフ・ノースは、このような挑発的な問いを投げかけている<sup>1</sup>。文学作品の歴史的背景を掘り下げたり、ワイルドを取り巻いた文化的文脈を分析したりすることばかりに余念のない「学者」たちは、生き方の指針を求める一般読者たちのニーズ(それが本当にあるとして)に答えられないのではないか? 現在支配的な「歴史主義/コンテクスト主義」のパラダイムは、文学研究の専門分化を推し進めることによって一般読者の姿を見誤るばかりか、ありうべき「生」そのものとの結びつきを断ち切ってしまったのではないか? そのような文学研究は「批評」とは言えないのではないか?

このような問題意識を正面から打ち出した本書の論争的性格はあきらかだろう。「簡略な政治的歴史」というサブタイトルで断りを入れていても、過去百年あまりの英米の文芸批評の展開をたかだか二百ページ程度でまとめあげるのには相当な力技である。その記述の端々に強引な印象を受ける読者も多いに違いない。だが、議論の大きな偏りや無数の細部の瑕疵を考慮しても、なお本書は多くの者の少なくとも一読には値する問題提起を含ん

でいるように思える。実際、比較的最近に PhD を終えたばかりの若手研究者の第一作としては、本書は数多くの書評者たち（ステファン・コリーニやブルース・ロビンスのような大御所を含む）からの注目を浴び、『ニュー・レフト・レビュー』や『バウンダリー2』など一部の媒体ではノース自身を巻き込んだ論争的な応酬もなされるに至った。

一言で説明するなら、本書の論争性は教科書的な文学理論の理解を「逆撫で」する歴史観にある。二〇世紀半ばのアメリカで文学研究の覇権を握ったニュー・クリティシズムの精読偏重は、テキストを社会や歴史から切断する保守的なエリートイズムだった。これに反発して台頭した六〇～七〇年代以降の文学理論は、階級・人種・ジェンダーを旗印に旧弊な文学研究が黙殺した歴史的コンテクストに注目し、そこに隠された政治的・文化的権力のはたらきを見出した。このような系譜にみずからを位置づける現代の「歴史主義/コンテクスト主義」の研究者たちはみずからの先鋭な政治性を言祝ぐ傾向にある、とノースは観察する。だが、そのような自己理解が根本的に誤っているとしたらどうだろうか。この自己欺瞞が抑圧しているのは、ネオリベラル化した大学業界とも親和的な専門性への引きこもりであり、現実社会との接点の喪失なのではないか？ そこに真の意味での批評は存在しないのではないか？

このような主張の基盤としてノースが提出するのは、「批評 (criticism)」と「学問 (scholarship)」についての二項対立的な理解であり、「文芸批評」についての独自の定義である。ノースによれば、本来の意味での「文芸批評」とは「文学作品を手段としてもちいる美学的教育の制度的プログラム——感受性の新たな諸領域、主体性の新しい諸様式、経験を受容する新たな諸能力を涵養することで、文化を直接に豊穡化する試み」(6)であったとされる。ノースは、一九二〇年代のイギリスでこのような意味での「批評」を大学の文学研究・教育を舞台に創始した批評家として I・A・リチャーズを高く評価している。リチャーズによる精読と実践批評の導入は、文学の自律的価値を称揚する観念論美学からは手を切って、作品とその「もっとも重要なコンテクスト」(31)としての読者との関係性に焦点を合わせるものだった。文学の生産ではなくて受容のコンテクストに焦点を合わせるリチャーズの実践は、文学と批評をつうじて読者の感受性に働きかけ、そ

それを改善し、ひいては文化の現状そのものに「介入」するものだった。それは「より広範な文化変容に奉仕する美学的教育の道具として文学を使う積極的な試み」(35)であったとノースは述べ、その介入主義的性格を強調する。

ところがこのリチャーズ(ならびにウィリアム・エンプソン)の精読と実践批評の実験は、F・R・リーヴィズの手によってエリートイズム的な大衆文化蔑視と結合され、さらに大西洋を渡ったアメリカのニュー・クリティックたちによって捻じ曲げられた。具体的には、精読はリチャーズが拒絶したはずの観念論美学へと再回収され、作者からも読者からも切り離された文学テキストの自律的・普遍的価値を称揚するニュー・クリティシズムのドグマとなった。六〇～七〇年代に台頭した文学理論が攻撃したのは、このようにニュー・クリティシズムによって介入主義的性格を失い、いわば骨抜きにされた精読の実践にほかならなかった。

だが、このような観点から従来の「文学」や「批評」観を拒絶した新世代の文学理論家たちは、盥の水と一緒に赤子まで流してしまったのではないかとノースは問いかける。具体的には、文学研究・教育の制度化の出発点においては存在したはずのリチャーズの「介入主義的」な精読の理念はいつのまにか忘却されてしまい、この時点で文学研究は「文化への直接介入」ではなく、「文化のたんなる分析」へと変貌してしまったのではないかと(72)。この顛末を「学問的転回(“scholarly turn”）」と呼称するノースは、その戦犯として、挑発的にもレイモンド・ウィリアムズ、フレドリック・ジェイムソン、テリー・イーグルトンなどの著作を槍玉に挙げている。階級の問題や資本主義批判にからめて観念論的美学の保守性を拒絶した彼らの(それ自体としては正当な)身振りは、歴史主義的分析の重要性を(過度に)強調し、さらに読者の精神に働きかける「美学的教育」としての「批評」の役割をも忘却することで、のちにニュー・ヒストリシズムが確立するに至る「歴史主義/コンテクスト主義」のパラダイムへの道を開いてしまった——と同時に、文学研究は批評性を喪失した「学問」になってしまった——のではないかと、という見立てである<sup>2</sup>。

この大きな構図で鍵語として機能しているのは「美学(aesthetics)」であり、ノースはそれを大まかに「唯物論的」種類と「観念論的」種類とに大別

している。通例イマニュエル・カントと関連づけられる「観念論的」美学が趣味判断の普遍性を標榜することでその背後にある特定の階級やジェンダーの利害・関心を隠蔽するものであるという批判はもはや常套句に類するものであり、詳細な説明は必要ないだろう。ノース自身もまた(主にニュー・クリティシズムを標的として)このような常套的美学批判を反復しているが、彼の議論の勘所はこの(否定的な)観念論美学にたいして、(肯定的な)唯物論的美学の可能性を担保するところにある。

ノースの議論の魅力でもあり、大きな瑕疵でもあるのは、この唯物論美学がいったいいかなるものでありうるのか、あまり明確にはされていないことだろう。リチャーズが主張した日常的経験と美的経験の連続性、さらにそれをベースにした精読による読者の感受性への介入と教化を、ノースは「唯物論的な兆しのあるもの」(30)と評価しており、あとの章では、ジョン・ラスキンに学んだウィリアム・モリスの美学における「深層的な種類の有用性(utility)」への注目もまた唯物論的美学の系譜として軽い言及がなされている(75)。このような評価から類推するに唯物論美学とは、ある芸術/文学作品が個別具体的な鑑賞者/読者の感受性に働きかけ、(なんらかの意味で)有用かつ実践的な変化を誘発する、そのような可能性に焦点を絞るものであるということになるのだろう<sup>3</sup>。それでは、そのような美学に基礎を置く真に望ましい「批評」はどのようなものでありうるのか? その素描すら示さぬままに終わる結論部にやや失望しつつ本書を閉じるのは、おそらく筆者ばかりではないだろう。

以上では本書の第三章までの内容を重点的に紹介してきたが、評者によっては近年の美学復興、クィア批評、世界文学論などをなで斬りにする第四章「批評的無意識」により多くの興味を見出すこともあるだろう。ほぼ同時代の研究/批評の趨勢をマッピングする大胆な試みはリスクに満ちたものでもあり、本章にはためらいがちな積極評価とドグマティックな裁断とが入り混じっている。特に、いまだ「生きた運動」(171)とのつながりを保っていたがゆえにある種の可能性を持っていたものとして(イヴ・コゾフスキー・セジウィックやD・A・ミラーの)クィア批評を部分的に評価するノースの筆致は、現代の状況を省察するうえでも興味深い材料と言えるだろう。

大きな観点に立てば、本書は九〇年代のセジウィックによる「パラノイド・リーディング」批判、さらにそれを受けた近年のリタ・フェルスキによるポストクリティークの提言に連なる議論として位置づけることが可能だろうが、誰にでもできそうなそうしたマッピング自体にはあまり価値はないだろう<sup>4</sup>。締めくくりとして、筆者は本書を読んで研究者としてよりもむしろ教育者としての不安に駆られたことを告白しておきたい。冒頭の問いの「一般読者」を「学生たち」に差し替えてみれば、筆者の不安をご理解いただけるのだろうか。ある文学作品を取り巻く歴史/コンテクストの知識をいくら教え込んだところで、教材として選定した文学作品が学生の心を動かすことがなければ、それは本来の意味での文学教育とは言えないのではないか？ ノースが駆使する空中戦の如き抽象的な語彙の背後には、そんな素朴な不安を刺激する文学への案外に素朴な情熱が込められているようであり、それを「素朴」として遠ざけがちな筆者の批評的自意識こそが真の意味の批評とは程遠いものなのかもしれない——こういった自己懐疑の迷宮を嫌わない向きには一読をお勧めしてどんな反応が返ってくるのか見てみたい、そんなリトマス試験紙のような効用がありそうな本ではある。

#### 注

- 1 ノースが実際にここで例として用いているのは一九二〇年代のイギリス文化とヴァージニア・ウルフの小説であるが、媒体の性格を考慮して、ここでは例をワイルドに差し替えている。もちろん、そうしてもノースの議論自体の理解に大きな影響はないと判断してのことである。なお、本書でワイルドの名前が言及されるのはわずか二回であり、後者の箇所ではワイルドはエズラ・パウンドとともに「カリスマ的で非理性的な人物たち」(143)と呼ばれており、どちらかというやや否定的な評価が下されている。
- 2 本書評はとりあえずノースの議論の論争的性格を紹介することに重点を置くため、ここでのウィリアムズやジェームソンの仕事の評価にたいする踏み込んだ検討はおこなわないが、ノースの批判が彼らの仕事のごく一部を切り取るかたちでなされていることは附言しておくべきだろう。例えばウィリアムズの小説家としての業績や公的知識人としての政治的活動はまったく考慮されておらず、またジェームソンの「歴史化」の作業に伴随する「ユートピア的衝動」の美学的性格にもノースは注目していない。

- 3 そのような美学の実践としてワイルドの作品と批評を連想することは決して牽強附会ではないだろうが、注1で述べたようにノースにはワイルドへの理解不足が見られ、彼が唯物論美学の具体化に失敗した一因をここに見ることができるかもしれない。
- 4 興味深いことにフェルススキの名前は本書では一度として言及されておらず、ここにはなんらかの戦略的な距離感を読み取りうるだろう。